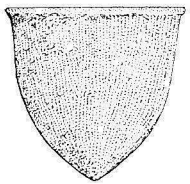
井草式土器

今から数千年の昔、井草あたりには太古の人々が住んでいた。見渡す限り原野と森林のつづく武蔵野台地を、飲み水と食べ物とを追い求めてきた太古の人人にとって、妙正寺池の発見は、さぞや心をとらえたものだったろう。わき水に沿った南向きの斜面を選んで土間を掘り、草で屋根をふいて竪穴式の住居を造った彼らは、鳥獣あるいは野草や木の実を常食とし、表面に縄目模様のついた土器をこしらえて、水入れに用いたりした。今川二丁目の新町遺跡からは、縄文早期のうちでも最も古い時代に属すると考えられる土器が発見されており、井草式土器の名で呼ばれている。妙正寺池や善福寺池のほとりからは彼らの住居跡や縄文式土器がたくさん見つかっている。天沼も彼らの行動半径にはいっていたとみえ、わずかではあるが、石のおのややじりなどが出土したという記録がある。本天沼保育園の付近からは、戦前かなりの土器片を採集することができた。戦後も井草の畑へ行けば、いくらでも拾えたそうだ。



井草式土器

1　上古・中世の天沼

(1)　古代「あまぬま」駅

論議の出どころ　『日本書紀』のあとを書き継ぐ勅撰史書として編纂された『続日本紀』の中に、奈良時代の神護景雲二(七六八)年、東海道巡察使の紀広名が次のように奏請したという記述がある。

武蔵国ノ乗潴・豊島ノ二駅、山海両路ヲ承ケテ使命繁多ナリ。乞フラクハ中路ニ準ジ馬十疋ヲ置カント。

要するに、武蔵国府(府中市)と下総国府(市川市国府台)を結ぶ官道にある乗潴駅と豊島駅は、東山道と東海道につながる宿駅のために公使の送迎が頻繁なので、常備の馬を東山道・東海道の駅並みの十頭にしていただきたい、という具申である。

武蔵国にあった二駅の所在地については、古くから学者の間で諸説あって特定されることがなく、しかも、乗潴はその読み方すら定説をみないままになっていた。江戸の下町儒者亀田鵬斎(一七五二―一八二六)は、月がのぼる武蔵野に立って次の詩を得ているが、このとき、彼が武蔵野のどこを歩き、乗潴を何と読んでいたかは定かでない。

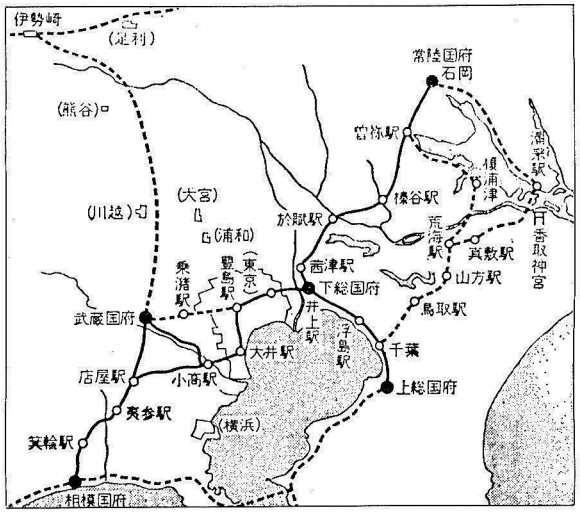
荒原古道細如縄　荒原の古道　細きこと　縄の如し
雲淡天低草気蒸　雲淡く　天低れて　草気蒸す
乗潴古駅今何有　乗潴の古駅　今　何れにか有る

遙看孤輪輾草升　遙かに看る　孤輪　草に輾びて升るを

乗潴＝天沼説　歴史地理学者の吉田東伍氏は、明治四十(一九〇七)年に『大日本地名辞書』を世に問い、この中で、乗潴は「あまぬま」と読み、杉並村の天沼がこの地であろうとしている。独力で完成させたこの辞典は、斯界に権威ある大著として迎えられ、その後は吉田説に触発されて、乗潴とは「剰りの沼」のことで、班田制で口分田として分配して「余った(残った)田のある沼」という意味も成り立つなど、「乗潴イコール天沼説」に立脚した研究者の発表も盛んになった。

また、乗潴を「あまぬま」と読むことには賛同しても、その所在地を埼玉県の大宮市天沼に求める説も根強くあった。

これらの論争に一応のけりを付けた形になったのが、戦後の日本史学の代表的学者とされた坂本太郎氏である。坂本氏は著書『日本古代史の基礎研究』の中で、古書には乗を剰と同じ意味に用いて「乗田」を「あまりの田」と読む例もあり、乗潴は「あまぬま」と読んで差し支えない。沼に潴を当てたのは、上奏文なので字画の多い



東海・東山道図

武蔵国の創設

「日本書紀」によると天武十三年紀(六八四)に百済からの帰化人を武蔵国においたという記述があり、ここに初めて「武蔵国」の名がみえる。大化の改新より四〇年後である。武蔵国の管下の郡は実に二一を数え、大国であった。このうち、現在の東京都に属する郡は、多麻・荏原・豊島の三郡と、足立・都筑両郡の一部であった。

武蔵国の公定路線

一〇世紀の初めに編集された「延喜式」の中に全国の駅名が列挙されている。武蔵国は店屋・小高・大井・豊島の四駅で、乗潴駅の名はすでにない。店屋は町田市のあたり、小高は川崎市小田中、大井は品川区大井町であろうと諸説はだいたい一致してきているが、ただ豊島駅の推定については、現在にいたるまで諸説紛々として定まるところがない。要するに、この延喜式の武蔵四駅を、神護景雲二年の乗潴・豊島両駅にいかに関係づけて推定するかが、諸説のわかれるところであろう。

古代道、消滅の危機

東京都国分寺市で確認された「東山道武蔵路」とみられる国内最大級の古代道路遺構の約六割が、同市や住宅・都市整備公団などが現地に計画している大規模住宅団地内の道路字を用いようとしたためだろうと述べた。

そして、杉並区の天沼は、豊島駅があったと考えられる旧隅田川西岸(皇居付近)と武蔵国府のあった府中市とのちょうど中間地点に位置し、天沼の北隣には沓掛(人馬の沓を掛けて置く店の意)と神戸(郡司の出先役所の意)という所があって、ともに古代駅跡に関係の深い地名であることからみても、乗潴駅は天沼にちがいなかろうと、吉田氏の天沼説を敷衍した。ここにいう沓掛・神戸はどちらも旧下井草村の古い小名である。

坂本氏の著書が世に出ると「乗潴＝天沼説」はいっそう現実味を帯び、新聞の天沼に関する町の紹介記事などにも、「天沼」が奈良時代からつづく古い地名であることを既定事実とする扱いが目立つようになった。

疑問や異論　天沼が都内でも有数の伝統をもつ土地柄であることは、郷土の誇りであり、ぜひそうであってほしいと願わずにいられない。しかしながら、もしも本当に古代の駅であったとすれば、これまで当然何らかの形で発見されてしかるべき駅跡の遺構なり遺物なりが、天沼の町から何一つ見つかっていないというのも、厳然たる事実である。それをほのめかす伝承すら、わたしたちは全く聞くことがない。

『杉並風土記』の労作で知られる郷土史家の森泰樹氏はこの事実を踏まえて、地勢、古道、伝承、出土品などの面から調査した結果、天沼説は物的証拠を伴わない地名だけの机上の推論にすぎない、と両氏の説を否定し、乗潴は「のりぬま」と読み、それがなまって「ねりま」となったとして、練馬説を主張しておられる。なお、その後の路線の変更で駅は間もなく廃絶され、乗潴の地名が再び文献に登場することはなかった。

(2)　天沼という地名

子どもの想像　社会科という戦後生まれの教科が始まってまだ間のない、昭和二十六(一九五一)年のガリ版刷り学級文集に、杉五の三年生のこんな詩が載っている。

> あまぬま　　高橋昌久
>
> ぼくたちの町の名は、
> どうして「あまぬま」なんだろう。
> むかし、天から雨がざんざかふって、
> ぬまができた。
> それで、だれかが
> 「ここは、あまぬまにしよう」
> と言って、きめたのかな。

「わたしたちの町」の学習でこの子が思いついたように、「天沼」の地名は、雨水がたまってできた沼地、の意味を持つとされている。

かつて、天沼八幡の西方一〇〇メートルの地点に、太古からこんこんとわき出る水がつくった一〇アールほどの池があった。江戸時代には、弁財天の祠にちなむ「弁天池」の名で近隣に親しまれた。池から流れ出た川は、天沼はもとより阿佐ヶ谷、馬橋、高円寺の村々を経て中野村まで、下流域の稲田を潤す大切な水源だった。谷戸川と呼ばれたその川は、八代将軍吉宗の奨励で中野にできた桃の名所のほとりを流れることから「桃園川」と名付けられ、末は善福寺川と合流して神田川に注いだ。高円寺辺では、すみついたカワウソのおびただしい巣穴で土手が決壊し、しばしば漏水騒ぎを起こしたという。

造成によって、消滅の危機に直面している。都教委や考古学関係者らは「貴重な遺構を全面保存して」と、計画の変更を求めているが、事業者側は予定通り道路造成を行う考えで、このまま計画が進められれば、千数百年前の貴重な古代道が現代の車道にとって代わられるという皮肉な結果となる。

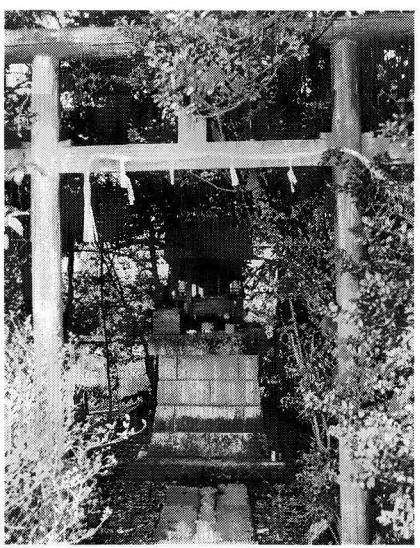
武蔵路は、畿内から東北地方まで延びていた律令時代の幹線道路・東山道の支線。昨年秋、その一部で幅約十二メートルの直線道路が約百三十メートルにわたり、両側の側溝などとともにほぼ完全な形で見つかった。

ところが現地では、池の周辺はもともと地下水位が浅く、長雨がつづくと池があふれて容易に水が引かなくて、雨があがったあとも一面の沼になった。天沼の地に足を踏み入れて農耕を始めた先人たちは、この池に自然への畏怖を覚えるとともに、農事の恵みをもたらす感謝をこめて、池のみならず、いつしか付近一帯を「雨沼」と呼びならわしていったと思われる。その時期は、乗潴が天沼であるなら当然奈良時代以前だが、やはり鎌倉か室町のころであろうか。

古文書に「天沼」の名称を見るのは江戸時代が最初だが、その以前からこの地に住んだ農民たちは、すでに定着していたであろう「あめぬま⇩あまぬま」の呼び名を公の村の名に定め、雨を同訓の天に改めて「天沼」としたものと想像できる。

時代はやがて、近世から近代へと目まぐるしく移る。しかし、農村の生命線ともいうべき潅漑用水としての弁天池や桃園川の営みはほとんど変わらなかった。

地図から消えた池と川　関東大震災後、桃園川の流域は交通の便利さもあって都心から移り住む人々の宅地化が進み、それにつれて川も池も有史以来の役割を終えた。


かつて弁天池のほとりにあった祠

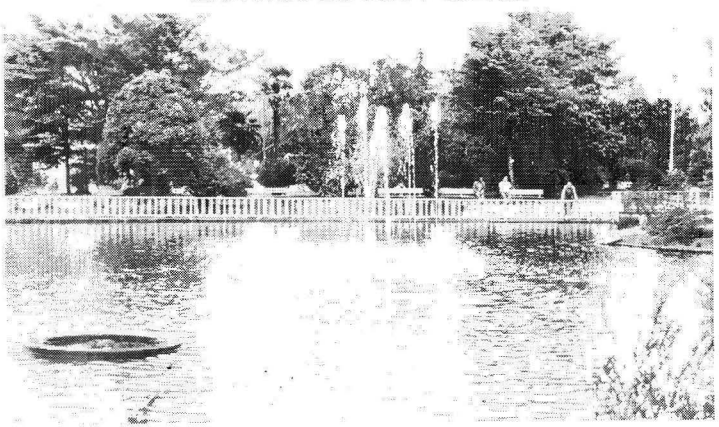
同市や住都公団などが住宅団地や公園など計約三十二ヘクタールの開発を計画。都教委と発掘にあたった西国分寺地区遺跡調査団は今月十七日、「これだけ一挙に出土したのは全国でも類を見ない」として、事業者側に全面保存を要望した。

しかし、事業者側は「今さら簡単に変更はできない」と、計画変更による全面保存は拒否。古代道に巻きつくように設計されている幅十二メートル、長さ約三百九十メートルの車道に重ならない部分だけを埋め戻し、保存する案を示した。

ところが、この案でも遺構の約六割が壊され、両側の側溝を完全のどかな田園の終焉と同時に、新興住宅の排水が流れこむ桃園川は、たちまち見るも無残に汚染する。けれども、弁天池のほうはその後もうっそうとした木立につつまれ、常に満々と清らかな水をたたえて、大きなコイの群れを養いつづけた。戦後になっても付近は昼なお薄暗く、家の人から弁天池に近づくことを厳しくとめられていた杉五や若杉の女の子は多かったはずである。

ところが、池は昭和三十(一九五五)年ごろから急速に枯渇し、ついには干上がって荒れはてた草むらのまま、とうとう昭和五十一(一九七六)年に埋め立てられる。さながら生活汚水路と化していた桃園川も程なく蓋をされて暗渠になり、上が遊歩道と姿を変えて、地名発祥の由来をもつ池と川の名は、ひっそりと天沼の地図から消えてしまった。

なお、清水三丁目にある妙正寺池も昔からよくあふれたので、「雨沼」と呼ばれたのはこの池だという説もある。しかしながら、妙正寺池は天沼と隣接する旧下井草村に属しており、しかも、池よりもはるか高台にあたる天沼の地名起源を妙正寺


近代的な公園に生まれ変わった妙正寺池

に備えた形で保存できる部分はほとんどなくなる。（後略）

平成八年一月二十五日
読売新聞の記事から

中世の杉並区

平安朝の末期、下総国猿島を拠点として反乱を起こした平将門は、一時は関八州を制圧する勢いだったが、このころの武蔵国は、国府である府中を除いてはまだどこも太古のままの草深い地で、現在の杉並の区域も史実の世界には登場せず、むしろ伝説のなかに生きていたといえよう。

天慶三（九四〇）年に将門が討たれて、その征伐に勲功のあった源経基が武蔵守に任ぜられた。経基の四代目の孫である源頼義は、安部氏平定のため奥州へ向かった。いわゆる前九年の役である。その途中、阿佐ヶ谷に軍勢を休息させたとき、雲が八つに分かれてあたかも源氏の旗印の白幡がなびくようであったので、これぞ八幡大神の加護、戦勝疑いなしと大いに喜び、凱旋の暁は神社を造営することを神明に誓った。こうして創建されたのが、現在の大宮八幡宮であると言われている。

また、三〇年の後、頼義の子義家は、後三年の役で清原氏一族を奥州に平定しての帰り道、大宮八幡宮に参詣して社殿を修造し、社のかたわらに別当である宝仙寺を創建したと

池に求めるのは、いささか無理があるのではなかろうか。

(3) 中世の天沼をしのばせるもの

天沼のかまくら道　われわれはとかく、天沼を通る主要道路は東西の向きに走ると考えがちだが、それは江戸開幕以降のこと。中世まではむしろ南北に通じるのが、天沼が外から開かれていた道であった。

天沼に「かまくら道」と呼ばれた古い道がある。成田西四丁目方面から文化女子大付属高校の前を通って天沼一丁目と阿佐ヶ谷北二・三丁目の間を北進し、日大二高の東側を本天沼一・二丁目の境界沿いに下井草二丁目の銀杏稲荷の方へとたどる。これは武蔵国府と下総国府を結ぶ官道から細かく枝分かれした道の一つにあたるいわゆる「いくさ道」で、「いざ鎌倉」に際して豊島氏の武将たちが石神井城から馳せ参じるためのものであった。こうしたかまくら道は、杉並にもほかに阿佐ヶ谷など何か所かある。

鎌倉時代中期の女流日記『問はずがたり』の作者二条は、出家後の正応三（一二九〇）年秋に武蔵国の府中から浅草観音に参詣する途中の風景を次のようにつづっている。

> 野の中はるばると分け行くに、萩・女郎花・荻・芒よりほかは又まじるものもなく、これが高さは馬に乗りたる男の見えぬ程なれば推し量るべし。三日にや、分け行けども尽きもせず、ちと傍へ行く道にこそ宿などもあれ、はるばる一通りは来し方ゆく末野原なり。

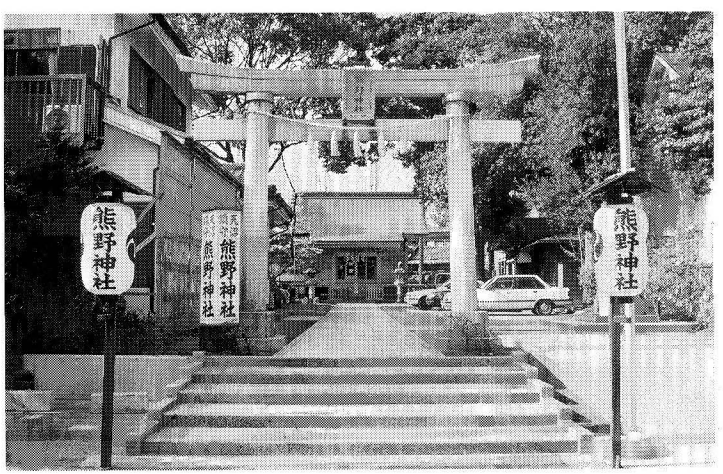
三日かかってもまだ果てしなく続く、丈高い草々の生い茂る武蔵野。官道でさえこのありさまだから、かまくら道といってもそれはただ細々と草が踏みかためられているにすぎず、当時の天沼もまた、このような荒涼とした風景の中に埋もれて在ったのであろう。

街道というにはあまりに規模が小さく、また、鎌倉に向かう枝道にすぎないので、ここでは「かまくら道」と表記しておく。

熊野神社の社伝　八幡太郎義家から数えて十世の孫にあたる南北朝の武将新田義貞は、元弘三（一三三三）年に上野国（群馬県）から兵を起こし、武蔵国の入間川・小手指原（埼玉県）で北条泰家の軍勢と戦った。義貞勢には、頼朝の旗揚げ以来源氏に縁故の深かった江戸氏や豊島氏らの武蔵武士が加わって士気大いに奮い、つづく分倍河原の合戦（府中市）でも大勝を得た。余勢を駆って一気に鎌倉へ攻めこんで北条高時を自刃に追いこみ、幕府は滅亡したのである。

熊野神社の社伝によると、新田義貞は鎌倉攻めの途中、天沼に宿営して社殿を修め、二株の杉苗を献植後、戦勝を祈願して出陣した

平成７年に造営されたばかりの現在の熊野神社全景



伝えられている。

義家の曽孫である義朝が平治の乱で平清盛に殺され、その子頼朝は伊豆に流されて、平家の栄華がつづいた。

治承四(一一八〇)年、伊豆で挙兵した頼朝に迫った平家方の軍勢のなかに、江戸重長・豊島清光ら武蔵の豪族がいた。石橋山の戦いに完敗して真鶴岬から海路で安房に逃れた頼朝は、陣容をたて直して上総から武蔵国にはいろうとしたが、江戸重長の軍にはばまれて隅田川を渡ることができなかった。間もなく和睦がなりたち、頼朝軍は江戸重長・豊島清光らを従えて武蔵野の原中を進んだ。途中、大宮八幡宮に立ち寄り、府中を通って鎌倉にはいったとされている。

鎌　倉（小学唱歌）

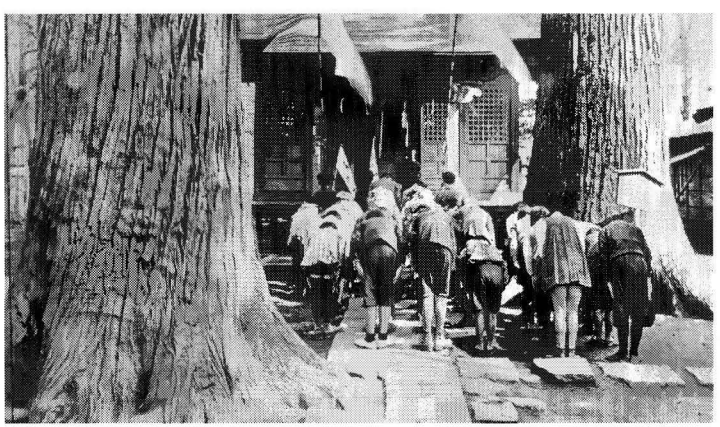
七里が濱の磯傳ひ、
稲村が崎、名將の
劔役ぜし古戦場。
極楽寺坂越え行けば、
長谷觀音の堂近く、
露坐の大佛おはします。
由比の濱べを右に見て、
雪の下道過ぎ行けば、
八幡宮の御やしろ。

とある。天沼宿陣が事実とすれば、軍勢は当然かまくら道を通って移動したのだろう。義貞の手植えとされる二本の杉は、幹周りが三かかえほどの大木となって知られたが、戦争末期に枯れて伐採され、現在は切り株が残されている。

同社伝には、室町時代の応永二(一三九五)年に朝倉三河守義景という武将が天沼に帰農した際、社殿を修復して十二所権現社と改め、天沼の鎮守社として人々の信仰を集めるようになったと記されている。武将の経歴は不明だが、やはり、かまくら道をたどって天沼まで来たにちがいない。天沼に多い浅倉姓はこの武将の後裔といわれている。

社殿の左手奥にある太現尊大神(ふとあらたまのおおかみ)の祠(ほこら)に安置される板碑(石板59㎝×23㎝)には、正応四(一二九一)年二月の銘が刻まれている。板碑とは中世の石塔婆の一種で、多くは死者の追善供養のためのものだが、この板碑は杉並で最古の銘だそうである。

昭和18年ごろの熊野神社（新田義貞手植えの大杉）



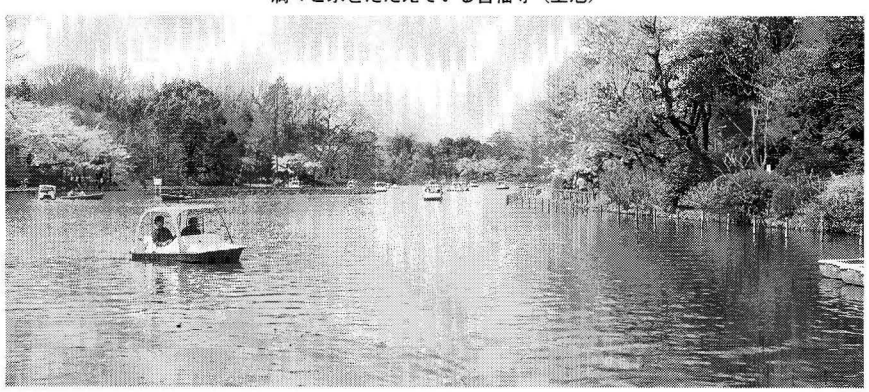
本天沼二丁目の天沼山蓮華寺は、年代不詳ながら室町時代に真長和尚(しんちょうおしょう)によって開山創建されたと伝えられ、最も古い檀家の戒名は正長年間(一四二八—二九)に授与されている。

また、伝承によれば、熊野神社の境外末社であった天沼八幡の創建は、戦国時代の天正年間(一五七三—九二)であったという。こうしてみてくると、少なくとも室町時代には、天沼に人々の確かな生活があったと考えてよさそうである。

(4)　中世の天沼周辺

遅野井伝説　今川二丁目にある観泉寺の伝えによると、文治五(一一八九)年、鎌倉から大軍を率いて奥州の藤原氏と弟義経を討ちに行く途中、善福寺池のほとりで宿営した源頼朝が、干ばつのため将兵の飲み水に困り、自ら弓の筈(はず)で地を掘ったところやっと水がわいた。水の出るのが遅かったので思わず「遅いのう。」とつぶやいたことから、この地を遅野井と名づけたとある。遅野井村は井草村の古名ではあるが、善福寺池の

満々と水をたたえている善福寺（上池）



登るや石のきざはしの、
左に高き大いちやう、
問はばや遠き世々の跡。

若宮堂の舞の袖、
しづのをだまきくり返し、
かへしし人をしのびつつ。

鎌倉宮にまうでては、
つきせぬ親王の御恨に、
悲憤の涙わきぬべし。

歴史は長し七百年、
興亡すべて夢に似て、
英雄墓はこけむしぬ。

建長、圓覺古寺の、
山門高き松風に、
昔の音やこもるらん。

太田道灌　道灌は兵学に通じるとともに学芸に秀で、五山の学僧や文人との親交が深かった。江戸時代に湯浅常山が書いた『常山紀談』の次の話がよく知られる。

太田左衛門大夫持資は上杉宣政の臣なり。鷹狩に出でて雨にあひ、ある小屋に入りて蓑を借らんといふに、若き女の何とものを言はずして、山吹の花一枝折りて出だしければ、花を求むるにあらずと怒りて帰りしに、これを聞きし人の、「それは、

七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし」と言ふ。持資驚きて、それより歌に志を寄せけり。

水がかれるとは考えられず、やはり伝説の域を出ない話であろう。

あさかや殿　この時代、天沼の近隣で早くから開けていたことを記録に残すのは阿佐ヶ谷である。紀伊国(和歌山県)熊野にある那智神社の神職が、応永二十七(一四二〇)年に江戸氏の流れをくむ豪族の名を列記した文書の中に「あさかやとの」とあり、「あさかや」を名乗る武将が阿佐ヶ谷に館を構えて、かまくら道を守っていたことがうかがえる。江戸氏は豊島氏と並ぶ勢力をもつ武蔵武士の棟梁で、熊野信仰にあつかった。居館が阿佐ヶ谷のどこにあったか明らかではないが、あさかや氏は棟梁の命令一下、館の近くで農耕をしながら住みついている一族郎党を引き連れて、戦場に赴いたのであろう。

荻窪八幡の道灌槇　室町時代の関東は、関東管領の上杉氏が扇谷上杉と山内上杉の二家に分かれて争い、武蔵武士の棟梁たちも両派に分かれてせめぎ合った。文明九(一四七七)年、太田道灌は扇谷上杉家の執事として、山内上杉家と結んだ豊島泰経の軍と江古田・沼袋原で戦って勝ち、次いで石神井城を攻め落とした。上井草に道灌山・道灌橋と名付けられた所があるのは、石神井城攻略のときに井草を通過し、後に道灌がこの付近の領主になったことに由来する。荻窪八幡神社の社頭に茂る槇の大木は、勝利祈願に訪れた道灌が植えたものといわれ、道灌槇として天然記念物になっている。

あさかい二郎　先の那智神社に残る文書には、天文十七(一五四八)年に書かれた豊島氏の武将の名簿があり、そこに「あさかい二郎」の名が出てくる。この記載から、当時の阿佐ヶ谷は石神井落城後の衰微した豊島氏が領有し、「あさかい二郎」が守っていたと分

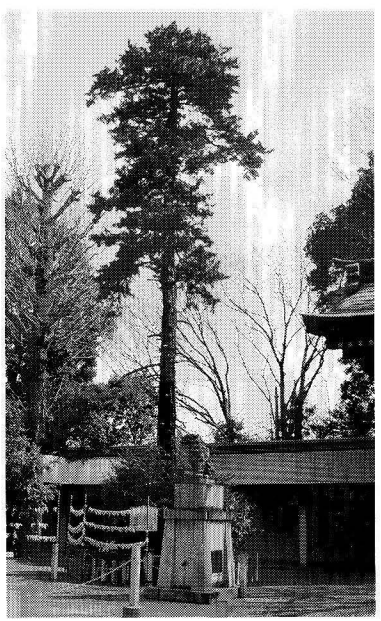
かる。また、あさかい二郎が「あさかやとの」の子孫とすれば、一族は途中で江戸氏から豊島氏に鞍替えしていたことになる。

江戸城普請役　道灌の死後、上杉氏の力は衰え、戦国の不安定な情勢の中で、武蔵国は小田原の北条氏の勢力圏内となった。主を失った阿佐ヶ谷の農民らが江戸城の塀の普請役を命じられていたことが、天正四(一五七六)年の北条氏印判状に見えている。

中野郷　当時、中野はすでにかなり田畑が開けており、阿佐ヶ谷・上荻窪・下荻窪・堀之内・和泉・永福寺はそれぞれ中野郷の一集落をなしていたようで、天正十二(一五八四)年の阿佐ヶ谷の人家は三二戸であったという。天沼についての記録はないが、阿佐ヶ谷と比べて著しく開発が後れていたとは考えにくい。

古い過去帳　代々、天沼の本村に住んでこられた森田弥一さん(杉五第一期)のお話によると、森田家に残る過去帳の最も古いものは、朝鮮で加藤清正がトラ退治をした慶長三(一五九八)年にさかのぼるそうである。森田さんはご先祖を、野武士のような生活をしながら農耕もして、いつしか天沼に住みついたのではなかろうかと推測しておられる。

荻窪八幡の道灌槇（天然記念物）



本稿は杉並第五小学校創立７０周年記念誌「新 天沼・杉五物がたり」から
著作権者杉五同窓会の許可を受け転載しています。執筆者は元杉五小教諭 人見　稠氏です。